

## 文章産出研究に関する考察

崎 濱 秀 行<sup>1)</sup>

本研究の目的は、文章産出領域でこれまでに得られた知見を概観し、今後の研究課題を示すことである。特に、大学教育を中心とした、学校教育課程における文章教育のあり方を探ることを目的とする。

### 文章産出とは？

日常生活の中で、我々はよく「書く」という活動を経験している。しかし、その中身は様々である。遠藤(1991)は短大生を対象として行った調査を通じて、「書く」とは、「表現する」、「伝達する」、「記憶する」、「考えをまとめる」ことであることを述べている。また、「なぜ書き方を知らなければならないか」という質問を行ったところ、「必要・常識」、「意思伝達」という回答が得られたことを指摘した。このように、「書く」とは言ってもその役割は様々であるが、崎濱(1998)は書く活動に関して(1)記録・記憶の道具、(2)要約活動、(3)作文活動、の3つの役割があることを見出している。本研究ではこのうち、「(3)作文活動」の部分に焦点を当てる。なお、教育心理学領域などで行われてきた研究を見ると、作文関連のものについて、「作文」および「文章産出」両方の言葉が使われているが、本研究では両者を同一のものとして扱い、「文章産出」という表記に統一を図る。また、扱う文章についても、一文から長文まで幅広く、産出形態にしても、筆記のみならず、口頭発話を扱ったものも見られるが、本研究においては、対象とする文章は「長文」、形態は「筆記」のものに限定する。

### 文章産出教育重視の必要性

「文章を書く」という活動は、手紙を書く、レポートを書く、物事を忘れないようにメモをとるなど、我々の日常生活においてよく見られる活動の1つである。電話などの発達に伴い、その重要性は一時低下したものの、近年の情報化社会の進展によって電子メールやホームページの利用者が急増し、今やコミュニケーションの手段としてよく利用されるようになった。このことを考えると、

今後の社会を生きる上で、教育場面でも、こうしたスキルの育成を図ることが強く求められる。文章を書くスキルを伸ばすことは極めて大切である。しかし、教育を効果的に進めていく上では、どのようなジャンルの、どのような文章産出スキルを育成する必要があるのかを見出すことがまずは必要になるであろう。そこで、次項では、学校教育における文章教育、および必要とされている文章の種類について検討する。

### 学校教育における文章教育

学校教育ではこれまで、書くことがあまり重視されてこなかった(工藤, 2002)。しかし、近年の情報化社会の進展にもなあって、学校教育の中でも文章を書くことの教育が重視されるようになってきた(文部省, 1999a, 1999b, 1999c)。市毛(1998)は、小学校における文章教育について述べており、その中で特に、言語をコミュニケーションの道具として使うという側面を重視し、発信型の文章産出に関する教育の必要性を挙げている。実際、こうした情報伝達文を書くための教育実践が盛んになりつつあり、小学校では文章を使った対談の実践(佐内, 2000)が、高等学校では、記者会見ごっこで得られた資料から新聞の原稿を作成する実践(小田和, 2000)が行われている。

一方、初等・中等教育課程同様に、今や大学などの高等教育課程においても文章教育は重視されつつある。実際、文章を書くことを授業として取り入れる大学は増加しており(小野, 1998)、受講学生から好評価を得るとの報告もある。(向後, 2002; 吉倉, 1999)。吉倉(1997, 1999)は大学における文章教育について触れ、今後の情報化社会に対応するため、客観的事実や状況を正確に伝えること、自分の意見や意図を筋道立てて述べるような、情報伝達型の文章(以下、情報伝達文と記述する)の書き方を学ぶことが重要であると主張している。筒井・山岡(1999)も、大学教育における課題として、人に事実を伝える形の文章を書く教育が必要であることを挙げている。しかし、情報伝達文産出教育重視の主張はいくつか見られるものの、①学生が実際に文章を書

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生

く場合、文章産出活動の中でもどの部分に着目すれば良いのか、②着目した活動を効率的に行うために、指導者はどのような介入を行えば良いのか、といった点についてはほとんど明らかにされていない(崎濱, 2003b)。その結果、吉倉(1999)が指摘するように、大学で文章教育を行う場合、担当者がそれぞれに試行錯誤を重ねながら教育活動に取り組んでいるのが現状である。こうした点から考えると、文章産出スキルの育成が課題となっているにもかかわらず、育成のためのカリキュラム作成に必要な知見がほとんど得られていないことになる。すなわち、教育改善に着手する手がかりを得ることすら難しい状態が続いていることになる。このような現状を抱えていることは、今後の文章教育を円滑に進めていく上でも好ましくないと考えよう。そこで、本稿ではまず、先行研究を通じて、情報伝達文産出スキル育成に際して重要となる活動がどのようなものかを挙げる。その上で、その活動を効果的に進めるための方法について考察を加える。

### 情報伝達文産出スキル育成に必要な事柄

情報伝達文産出スキルを高める方法を考える上では、これまでに、文章産出の熟達者・非熟達者に焦点を当て、その違いを比較する、という方向からの検討がなされてきた。その中身は、(1)メタ認知・自己調整・自己効力感といった、書き手の内的側面に関する検討、(2)文章産出スキルの違いが書き手の文章産出プロセスや産出文章に及ぼす影響、という形で、大きく2つの側面に分けることができる。そこで、以下では、各々の側面について検討を加えた知見を概観する。

#### (1) 内的側面に関する検討

まず、自己効力感について検討した知見を挙げる。自己効力感が学習者の課題遂行成績に影響を与えることについては、教授学習場면을対象とした研究において知見が得られている。Schunk(1981, 1982, 1984)は、小学生の算数学習に関する研究を行い、自己効力感の高い学習者の学業成績が高くなることを示した。また、Pajares & Miller(1994), Pajares & Miller(1995), Pajares(1996)でも、自己効力感が学業成績を規定する変数であることが示唆された。

一方、数は少ないが、文章産出領域でも自己効力感を扱った知見が得られている。Zimmerman & Bandura(1994)は、文章産出教育を受けている大学生から得られたデータを分析し、書き手の自己効力感を高めることが文章産出スキル上昇にも影響を及ぼすことを報告した。

このように、自己効力感の重要性を示す知見が得られ

てはいるが、学習活動において自己効力感を高める上では、そのために必要な学習活動方略(あるいは文章産出活動方略)の習得も無視できない。そのことについては、メタ認知や自己調整に関する知見の中で検討されてきた。McDonough(2000)は、外国語学習に関する研究を行い、学習者は自己の持つ学力に関わらず、何らかの形で内的な自己調整を行っていることを見出した。では、実際に学習者がどのような自己調整方略を持っているのだろうか。そして、それらを利用する度合い(重視する度合い)は学習者によって異なるのであろうか。これらの点については、Zimmerman & Martinez-Pons(1988, 1990)が検討を行っている。Zimmerman & Martinez-Pons(1988)は、高校1年生に対し、教室場面や宿題に取り組む場面で学習を行う際、どのような自己調整学習方略を用いるかについて、面接を通して尋ねた。その結果、①組織化&変換、②目標設定&プランニング、③情報検索、④結果の記録あるいはモニタリング、⑤リハーサル・記憶、といった学習方略を有しており、全体として、高成績の生徒の方がこれらの自己調整方略を使う度合いが多いことを述べている。また、こうした自己調整方略の使用度合いは学年上がるにつれて多くなることを示す結果も得られている(Zimmerman & Martinez-Pons, 1990)。

では、文章産出に関して、書き手自身はどのようなメタ認知や自己調整活動方略を有しているのであろうか。あるいは、書き手によってメタ認知や自己調整活動方略に何らかの違いが見られるのであろうか。この点について、いくつかの検討がなされている。Humes(1983)は、文章産出スキルの高い書き手と低い書き手を比較検討し、スキルの高い書き手の方が、自己調整活動の下位プロセスである「プランニング」に時間をかけていることを明らかにした。Scardamalia, Bereiter, & Steinbach(1984)は、小学生(文章産出の「非熟達者」と大学生(文章産出の「熟達者」とを比較し、文章産出プロセスにおける自己調整活動の違いを検討した。その結果、熟達者の場合、書く内容を決めて実際に文章化した後、それが自分の書こうとした内容であったかどうかを検討することが可能であるのに対し、非熟達者の場合、書いたものを吟味することが不可能であることを明らかにした。このように、文章産出スキルの程度によって産出文章の中身を吟味できる度合いに違いがあるといった、書き手の自己調整活動の違いを示した知見が得られている。

このような検討は、メタ認知に関する研究の中でもなされている。崎濱(2003b)は大学生・専門学校生を対象にして、文章産出活動に関して持っているメタ認知と

してどのような事項があるか、また、それらが全体としてどのような構造をなしているのかを検討した。その結果、書き手が持つメタ認知には「伝わりやすさ（例：他の人が見てもわかりやすい文の構成にする、分かりやすい内容にする、など）」・「読み手の興味・関心（例：読む人が内容に興味を持ってくれるように書く、など）」・「簡潔性」（例：文を短くする、難しいことは書かない、など）の3側面があることを見出した。また、文章産出スキルの高い書き手の方が産出スキルの低い書き手に比べ、「伝わりやすさ」を重視し、「簡潔性」をあまり重視しない、といった特徴が見られることも示した。

これらの知見を踏まえると、文章産出スキルの高い書き手が低い書き手に比べて自己調整方略についての知識を持っていること（Ferrari, Bouffard & Rainville, 1998）、および、産出スキルの高い書き手の方がよりゴールを見据えて文章産出活動を行っていること、などが考えられる（Zimmerman & Kitsantas, 1999）。

それでは、こうした熟達者が行っている活動方略の使用を促すために、どのような教育環境が必要になるであろうか。Ley & Young (2001) は、学校場面において学習者の自己調整を援助していく上で、① 学習者たちにモニタリングの機会を与える意味で、教授の目標およびフィードバックを与えること、② 学習者に、評価を与えたり、自分で評価する時間を与えること、などが必要であると主張している。しかし、文章産出については、熟達者でさえ、産出活動についてのモニタリング、あるいは自己評価を行うことが極めて困難であるという主張も得られている。崎濱（2003b）では、書き手の文章産出スキルの高さによって重視しているメタ認知の側面に違いがあり、スキルの高い書き手の方が、「伝わりやすさ」という、文章全体に関する事項を重視する度合いが高いことが示されてはいる。しかし、実際の文章産出活動でメタ認知をどの程度活用しているのかを尋ねたところ、産出スキルによる違いは見られなかったことを報告した。この結果を踏まえると、文章産出スキル向上のためには、こうしたメタ認知的側面を実際の産出活動場面で活用することができるよう、何らかの具体的な外的介入が必要であることが考えられる。実際、Ley & Young (2001) も、学習活動方略の使用を促進させるための教授や活動の機会を設けることの重要性を指摘している。そこで、次に、文章産出スキルの高さによって、文章産出プロセスや書き手が産出したテキストにどのような違いが見られるか、という点について検討を加える。

## (2) 文章産出スキルの高さが文章産出プロセスや産出文章に及ぼす影響について

書き手が持つスキルの違いが文章産出プロセスや産出文章に影響を及ぼすことについても、これまでにいくつかの検討がなされてきた。Ferrariら（1998）は、大学生がカナダのある2つの都市を比較した文章について検討を加え、文章産出スキルの高さによる産出文章の違いについて検討を加えた。その結果、文章産出スキルの高い書き手が書いた文章の方が全体の産出字数が長くなることを報告した。同様の結果は、McCutchen, Covill, Hoyme, & Mildes (1994), McCutchen, Abott, Hreen, Beretvas, Cox, Potter, Quiroga, & Gray (2002) でも得られている。また、Flower & Hayes (1981), Graham, Berninger, Abott, & Whitaker (1997), McCutchen (1996) は、熟達者と非熟達者を比較し、非熟達者の場合、文章産出活動において、生み出した内容を言語化・文章化するプロセスの流暢さが欠けていることを報告し、それゆえに、文章産出活動によって課される様々な要求を扱うことができないことを指摘した。逆に言えば、こうした流暢さを獲得することが産出文章の質を高めるためには必要であると言える（Bereiter & Scardamalia, 1987; McCutchen & Perfetti, 1982）。Grahamら（1997）、MuCutchen (1996)、McCutchenら（1994, 2001）の知見は、主に小中学生の書き手を対象としたものであった。しかし、高校生・大学生といった成人の書き手を対象とした研究でも同様のことを示す知見が得られている（Benton, Kraft, Glover, & Plake, 1984）。

さらに、課題のジャンルに関して持っている書き手の知識量の違いに触れた知見も得られている。MuCutchen (1994) は、ジャンルに精通することにより、文章に書く内容の選択の際に長期作業記憶へのアクセスが容易になることを見出した。また、MuCutchen (2000) は、ジャンルに精通することによって、書き手が文章を書く際に、「誰に向けて文章を書くか」という部分への知識を広げることになることを見出した。すなわち、読み手に応じて適切な語彙や統語を選択できる度合いが高まることを主張している（Langer, 1992）。それだけでなく、推敲過程に及ぼす影響を検討した知見も得られている。Fitzgerald (1987) は、書き手の推敲過程について検討し、熟達者の方が非熟達者に比べ、内容に関連した書きなおしを行うことを明らかにした。また、McCutchen, Francis, & Kerr (1997) は、文章産出スキルの高い書き手の場合、推敲する時に産出テキストのマクロ構造（Kintsch, 1998; Kintsch & van Dijk, 1978）に着目しており、推敲の1回目ですえ、

全体のまとめとなっている部分をよく吟味していることを示した。

同様の結果は、Durkin (1978-1979), Brown (1976), Teale & Sulzby (1987), Fitzgerald & Teaslet (1986), Englert, Stewart, & Hiebert (1988), Langer (1986) でも示されている。

### 文章産出スキルに影響を及ぼす事項とは？

先に挙げた知見を踏まえると、文章産出スキルを高める方略の1つとして、課題のジャンルに関する知識、すなわち、内容的側面 (Scardamalia ら, 1984) が影響を与えることが考えられる。文章産出プロセスに関する研究 (Flower & Hayes, 1981; Hayes, 1996) によると、文章産出の際、書き手は、① 書く内容の生成 (長期記憶から必要な情報を引き出す)、② 挙げた内容の取捨選択、内容同士のつながりを考える、③ 実際に書く、④ 書いた文章を推敲する、といった活動を行いながら文章を完成させることが知られているが、いずれのプロセスにおいても書き手自身が課題に関して持っている知識が関与することが考えられる。では、内容に関する知については先行研究でどのように扱われてきたのであろうか。Voss, Vesonder, & Spilich (1980) は大学生に対し、野球のゲームに関する文章を産出するよう求めた。そして、野球についてどのくらい知っているかを基に被験者を分け、被験者の産出文章を比較検討した結果、野球をよく知る書き手の文章の方が高い評価を得た。

このように、課題に対して持っている知識量の影響は無視できないことが考えられる。しかし、テニスのゲーム進行についての文章産出課題を扱った研究 (岸・綿井, 1997) では、テニス経験者が書いた文章の方が、読み手がゲームのルールを理解していることを前提にして説明を行ったことから、むしろわかりにくくなるとの結果が得られている。このことから、知識量ではなく、むしろ知識の中から情報を取捨選択することの方が大切であると言えよう。実際、岸・綿井 (1997) 以外でも、情報の取捨選択の重要性が示されてきた。van der Hoeven (1999) は11・12歳児を対象に文章産出課題を行い、文章産出プロセスの初期においてアイデアを産出し、中盤でそれらの情報の取捨選択を行って文章をまとめた書き手 (児童) の文章が高い評価を得ており、高い評価を得た書き手は、内容取捨選択の際に内容をよく吟味していたことを明らかにした。また、崎濱 (2003a) は、大学生・専門学校生に対して「オカピ」という動物の資料を配布し、配布資料を使ってこの動物を紹介する文章を産出するよう求めたところ、産出文章の評価が高い文章ほど、オカピ全体の見かけをイメージしやすい情報を多

く含んでいたことを示した。さらに、Langer (1984) は、書き手が持っている知識量よりもむしろ、持っている知識をまとめることや、並べ替えて文章化することが産出文章の質に強く影響することを示した。

これらを踏まえると、内容の取捨選択、内容同士のつながりの検討の方が文章産出活動においては重要であると言えよう。それでは、こうした内容的側面に関する活動を促していく上で、書き手にどのような介入を行うことが可能であろうか。次項で検討する。

### 書き手に対して行いうる介入についての検討

文章産出スキルを高めていく上では、書き手が文章を産出する場面において何らかの介入を行う、という手法がよくとられている。その一つとして、読み手を意識する、といった形の介入法が考えられよう。実際、先行研究でも読み手意識の有効性を検討した知見が見られる。杉本 (1989) は大学生被験者を対象にして文章産出課題を行った。その際、「自分 (書き手自身) がペット好きであるとして、動物が嫌いでペットを飼う人の気が知れないと思っている人に向け、ペットのことについて書いてください」という教示を与えたところ、書き手は内容、文章全体の構成、表現を非常に吟味していた。しかし、杉本 (1989) とは反対の結果を示す知見も存在する。佐藤・松島 (2001) は中学3年生の被験者を対象に、数学で扱う図形の描き方の手続きを説明する文章の産出を求めた。その際、読み手として中学1年生を想定することを求める群を設定し、産出文章に及ぼす影響を検討した。しかし、こうした教示を与えたことの効果は見られなかった。また、崎濱 (2003c) は専門学校生を対象に、オカピという動物を紹介する文章を産出するよう求めた。その際、読み手として20歳程度の人 (書き手と同年代) を想定する群、および高校1年生を想定する群を設け、両者の条件下で書かれた文章の違いを検討した。しかし、記載内容、文章の総合得点など、いずれの側面においても群間の違いは見られなかった。このことから、教示によって読み手の知識状態や内容理解の程度が十分に想定できない場合、読み手を意識することを伝えてもその効果が見られないと考えられる。実際に、書き手からのフィードバックを受けた後に再度文章を書くと、産出文章の質に改善が見られるといった報告がある (岸・綿井, 1997)。

このように、読み手を意識すること、などの外的介入法はあるものの、その効果については一致した見解が得られていない。もちろん、こうした問題を解決する方法としての読み手からのフィードバックを受けるといった手法はあるだろう。しかし、教育場面でそれを実践するのは極めて困難である。加えて、現実の生活場面、学習場

面を考えると、特に大学生の場合、個人レベルで文章産出を行う場合が多い。このことから、効果的な介入を考えていく上では、こうした学習者が置かれている状況を十分に考慮することが求められる。そこで、近年の大学生がおかれている文章の読み書き場面を考えると、レポートを書く、電子メールの送受信を行う、メールの中身を読む、などが挙げられよう。そして、これらの活動の特徴を考えてみると、短い時間で沢山の情報を処理する、あるいは伝えたい内容を手短かに、かつコンパクトにまとめて他者に伝える、といったことが挙げられよう。また、大学入学試験や教育場面でも、字数制限を課した文章産出課題が取り扱われている。とりわけ、図表の読み取りなどを目的とした比較的字数の短い論述課題（100字～400字程度）（大野木，1994）、200字程度の比較的短い文章を書く活動（金子，1988，1989）が見られる。

では、字数制限によってどのようなメリットが得られるのであろうか。文部省（1993）や梅田（2001）によると、文章の読み手や指導者の立場からは、①（文章を読んで）疲れない、②（文章から）まとまった情報が得られる、③短時間での指導が可能である、④学習者が作文する機会が増える、などの点が挙げられている。しかし、書き手自身が得るメリットについての報告も無視できない。清水（1953）・梶田（1998）・梅田（2001）は、字数制限を課すこと自体が書き手の文章産出活動に及ぼす影響について述べている。清水（1953）は、多くの論文を1000字で紹介しなければならない、という場面に遭遇した経験を基にして、少ないスペースの中で読んだ論文の内容を紹介しなければならない時に、その中でどのような情報が必要であるかについて吟味して選択し、それらをどのようにつなげていくかを一生懸命考えたことを報告した。この報告を受け、梶田（1998）は、文章を書く際にスペース（産出可能字数）を短く制限することにより、多数の情報の中から何を捨て、何を残し、残したものをどう編成するかといった操作が促されることを指摘した。また、梅田（2001）も、大学における400字作文教育の実践を踏まえ、産出字数を制限することで、書き手は必要な情報を取捨選択しなければならないことを述べている。

このように、字数を制限し、制限字数を短くすることで、書き手の内容情報の選択、情報の効率的使用に対してメリットをもたらすことが期待される。また、字数が短くなっても情報同士を何とかつなげようとするのが期待できる。これらの点を踏まえ、読み手を意識する（杉本，1991；佐藤・松島，2001）、書き手に読み手からのフィードバックを与える（岸・綿井，1997）、文章産出活動を援助するための外的手がかりを示す

（Butcher & Kintsch, 2001; Scardamalia ら，1984）といった外的介入を行う場合と比べても、字数制限が書き手の文章産出活動に対して極めて有益であると言えよう。崎濱（印刷中）は大学生被験者を対象に、モーリタニアという国の資料を呈示し、この国を知らない仲間に向けて国の紹介をするための文章を産出するよう求めた。その際、文章を200字、400字、字数無制限のいずれかで産出することを求めた（以下、それぞれ、200字群、400字群、字数無制限群と記述する）。その結果、200字群において、国を紹介する上で重要とされる情報の含有率が高くなった。また、200字群、400字群において、一文の長さが字数無制限群に比べて短くなった。さらに、200字群において、情報の選択や情報同士のつながりを保つことに困難を感じる度合いが高くなった。一方、産出文章を、① 選択情報の適切さ、② 情報どうしのつながり具合、③ 総合得点、という3観点から評価したところ、いずれの観点においても群間に有意差は見られなかった。このことを踏まえ、崎濱（印刷中）は、産出字数を短くすることで、書き手は情報の取捨選択や情報同士のつながりをより意識しなければならなかったことを示唆した。すなわち、字数制限を課し、産出文章の長さを短くすることで、書き手の情報選択や選択情報のつながりの検討が促進されうることを示したのである。

## 今後の課題

崎濱（印刷中）により、今日の大学生に求められる文章産出スキルを育成する方法の1つとして、産出字数を短く制限することの有効性が示された。こうした課題を用意することにより、書き手は自身が文章を書く場面において、情報を自ら精選し、それらを効果的につなげることを実践することが考えられる。しかし、最終的には、産出字数を短く制限されても書き手自身が困難を感じることなく情報を取捨選択し、効率的に用いるようにするにはどうすれば良いかを検討していく必要があるだろう。金子（1988）は短期大学における教育実践を通じ、くりかえし字数制限文を書くことで、書き手の情報選択スキルに上達が見られたことを報告している。では実際、産出字数を短くした状態で「くりかえし書く」ことによって、情報選択や表現スキルにおける上昇が見られ、産出文章に対する評価は向上するのであろうか。崎濱（2004a, 2004b, 2004c）がこの点に関連した事項を検討している。崎濱（2004a）は、大学生に対し、教育心理学の時間に学習した事項を高校1年生に向けて600字程度で紹介する、という課題を授業ごとに課した。その結果、最後の方が最初の頃に比べ、産出文章に対する評価得点が上昇し、文章完成までの時間が減少することを報

告した。また、評価得点の伸びは文章産出スキルの低い書き手で特に見られることも報告されている(崎濱, 2004b)。さらに、産出文章について、① 選択情報の適切さ、② 情報どうしのつながり、③ 適切な語句・表現の使用による読み手への伝わりやすさ、という3観点を設け、書き手から得られた文章を細かく評定したところ、① 選択情報の適切さ、② 情報どうしのつながり、の2点において、最後の評定値の方が最初に比べて高くなった(崎濱, 2004c)。これらの課題を遂行する際の最適産出字数を尋ねたところ、おおむね600字よりも多い字数が挙げられたことから、字数を短くしてくりかえし書くことで、情報の選択、情報どうしのつながり、以上2点に関するスキルを高めることができると考えられる。ただし、書き手自身に尋ねた最適産出字数が600字よりもどの程度多かったのかについては、まだ明らかにされていない。そのため、600字が書き手にとって相当に厳しい制限字数になり得たかどうかは詳細に検討する必要がある。このことから、「字数を短く制限した文章をくりかえし書く」ことによって崎濱(2004a, 2004b, 2004c)同様の結果が得られるかどうか、さらに検討することが必要になろう。

## 引用文献

- Benton, S. L., Kraft, R. G., Glover, J. A., & Plake, B. S. 1984 Cognitive capacity differences among writers. *Journal of Educational Psychology*, 76, 820-834.
- Bereiter, C., & Scardamalia, M. 1987 *The Psychology of Written Composition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Berninger, V., Fuller, F., & Whitaker, D. 1996 A process model of writing development: Across the life span. *Educational Psychology Review*, 8, 193-205.
- Brown, A. L. 1976 The construction of temporal succession by preoperational children. In A. D. Pick (Ed.), *Minnesota symposium on child psychology* (Vol. 10, Pp. 28-83). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Butcher, K. R., & Kintsch, W. 2001 Support of content and rhetorical processes of writing: Effects on the writing process and the written product. *Cognition and Instruction*, 19, 277-322.
- Durkin, D. 1978-1979 What classroom observations reveal about reading comprehension instruction. *Reading Research Quarterly*, 14, 481-533.
- 遠藤めぐみ 1991 夜間短大生の読み書き概念 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 347-348.
- Englert, C. S., Stewart, S. R., & Hiebert, E. H. 1988 Young writer's use of text structure in expository text generation. *Journal of Educational Psychology*, 80, 143-151.
- Ferrari, M., Bouffard, T., & Rainville, L. 1998 What makes a good writer? Differences in good and poor writers' self-regulation of writing. *Instructional Science*, 26, 473-488.
- Fitzgerald, J., & Teaslet, A. B. 1986 Effects of instruction in narrative structure on children's writing. *Journal of Educational Psychology*, 78, 424-432.
- Fitzgerald, J & Markham, L. R. 1987 Teaching children about revision in writing. *Cognition & Instruction*, 4, 3-24.
- Flower, L., & Hayes, J. R. 1981 A cognitive process theory of writing. *College Composition and Communication*, 32, 365-387.
- Graham, S., & Harris, K. 1997 Self-regulation and writing: where do we go from here? *Contemporary Educational Psychology*, 22, 102-114.
- Hayes, J. R. 1996 A new framework for understanding cognition and affect in writing. In Lavy, C. M., & Ransdell, S. (Eds.), *The science of writing: Theories, methods, individual differences, and applications*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Pp.1-28.
- Humes, A. 1983 Research on the composing process. *Review of Educational Research*, 53, 201-216.
- 市毛勝雄 1998 発信型の作文指導(作文の一). 月刊国語教育, 98年5月号, 112-116.
- 梶田正巳 1998 勉強力をつける ちくま新書
- 金子泰子 1988 短期大学での文章表現指導: 短作文(二百字字数制限作文)指導の研究 紀要(上田女子短期大学), 11, 11-26.
- 金子泰子 1989 短期大学での文章表現指導 その2: 短作文指導を通しての文章表現力の展開 紀要(上田女子短期大学), 12, 23-48.

- Kintsch, W. 1988 *Comprehension: A paradigm for cognition*. New York, NY, US: Cambridge University Press.
- Kintsch, W & van Dijk, T. A. 1978 Toward a model of text comprehension and production. *Psychological Review*, **85**, 363-394.
- 岸学・綿井雅康 1997 手続き的知識の説明文を書く技能の様相について. 日本教育工学雑誌, **21**, 119-128. (Kishi, M., & Watai, M. 1997 On the aspects of skills for procedural expository writing. *Japan Journal of Educational Technology*, **21**, 119-128.)
- 向後千春 2002 言語表現科目の9年間の実践とその再設計 大学教育学会誌, **24**, 98-103. (Kogo, C. 2002 The redesigning of the "basic language arts" course at Toyama University after nine years. *Journal of the Liberal and General Education Society of Japan*, **24** (2), 98-103.)
- 工藤陽一 2002 言語活動の段階的指導について・書く活動を中心に—高等学校国語科における実践カリキュラム—. 日本語学, **21** (4), 75-84.
- Langer, J. A. 1984 The effects of available information on responses to school writing tasks. *Research in the Teaching of English*, **18**, 27-44.
- Langer, J. A. 1986 *Children reading and writing: Structures and strategies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Langer, J. A. 1992 Speaking and knowing: Conceptions of understanding in academic disciplines. In A. Herrington & C. Moran (Eds.), *Writing, teaching, and learning in the disciplines* (Pp. 68-85). New York: Modern Language Association.
- Ley, K.; Young, D. B. 2001 Instructional Principles for Self-Regulation. *Educational Technology Research and Development*, **49**, 93-105.
- McCutchen, D. 1994 The marginal number three, plus or minus two: Working memory in writing. In J. S. Carlson (Series Ed.) & E. C. Butterfield (Vol. Ed.), *Advances in cognition and educational practice*. Vol. 2. *Children's writing: Toward a process theory of the development of skilled writing*. Greenwich, CT: JAI.
- McCutchen, D. 1995 Cognitive processes in children's writing: Developmental and individual differences. *Issues in Education: Contributions from Educational Psychology*, **1**, 123-160.
- McCutchen, D. 1996 A capacity theory of writing: Working memory in composition. *Educational Psychology Review*, **8**, 299-325.
- McCutchen, D. 2000 Knowledge, processing, and working memory: Implication for a theory of writing. *Educational Psychologist*, **35** (1), 13-23.
- MuCutchen, D., Abbott, R. D., Green, L. B., Beretvas, S. N., Cox, S., Potter, N. S., Quiroga, T., & Gray, A. L. 2002 Beginning literacy: Links among teacher knowledge, teacher practice, and student learning. *Journal of Learning Disabilities*, **35**(1), 69-86.
- MuCutchen, D., Covill, A., Hoyme, S. H., & Mildes, K. 1994 Individual differences in writing: Implications of translating fluency. *Journal of Educational Psychology*, **86**, 256-266.
- McCutchen, D., Francis, M., & Kerr, S. 1997 Revising for meaning: Effects of knowledge and strategy. *Journal of Educational Psychology*, **89**, 667-676.
- McCutchen, D & Perfetti, C. A. 1982 The visual tongue-twister effect: Phonological activation in silent reading. *Journal of Verbal Learning & Verbal Behavior*, **21**, 672-687.
- McDonough, S. K. 2000 Promoting self-regulation in foreign language learners. *Clearing House*, **74**, 323-326.
- 文部省 1993 中学校国語科資料 国語科における学習指導と評価—作文の学習指導— 文部省
- 文部省 1999a 中学校指導書 国語編 文部省
- 文部省 1999b 高等学校指導要領解説 国語編 文部省
- 文部省 1999c 小学校指導書 国語編 文部省
- 日本大辞典刊行会 (1978)
- 小野米一 1998 大学生への作文教育実践 語文と教育, **12**, 43-53.
- 大野木裕明 1994 テストの心理学 ナカニシヤ出版
- 小田和早苗 2000 ヒョウタンからコマ?の「記者会見」ごっこ. 授業づくりネットワーク, **169**, 24-26.

- Pajares, F. 1996 Self-efficacy beliefs in academic settings. *Review of Educational Research*, 66, 543-578.
- Pajares, F., & Miller, M. D. 1994 Role of self-efficacy and self-concept beliefs in mathematical problem solving: A path analysis. *Journal of Educational Psychology*, 86, 193-203.
- Pajares, F., & Miller, M. D. 1995 Mathematics self-efficacy and mathematics performances: The need for specificity of assessment. *Journal of Counseling Psychology*, 42, 190-198.
- 崎濱秀行 1998 意思伝達における「書く」という行為の及ぼす効果—短作文課題の場合— 教育心理学論集, 27, 1-7.
- 崎濱秀行 2003a 文章産出スキルの違いが文章中における使用情報に及ぼす影響 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 514.
- 崎濱秀行 2003b 書き手のメタ認知的知識やメタ認知的活動が産出文章に及ぼす影響について 日本教育工学雑誌, 27, 105-115. (Sakihama, H. 2003b The effects of writers' meta-cognitive knowledge and meta-cognitive activities on text production. *Japan Journal of Educational Technology*, 27, 105-115.)
- 崎濱秀行 2003c 読み手に関する情報の違いが文章産出プロセスや産出文章に及ぼす影響について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 207-212.
- 崎濱秀行 2004a くりかえし書くことは、書き手の文章にどのような変化をもたらすのか?—内容的側面に着目して— 日本読書学会第48回大会発表論文集, 104-112.
- 崎濱秀行 2004b 「くりかえし書く」ことの効果に関する検討(1) 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1183.
- 崎濱秀行 2004c 「くりかえし書く」ことの効果に関する検討(2)—文章産出スキルの違いに基づいた検討— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 439.
- 崎濱秀行 印刷中 字数制限は、書き手の文章産出活動にとって有益であるか? 教育心理学研究, 53, (Sakihama, H. in press Is “limiting the number of characters” effective in writing? *Japanese Journal of Educational Psychology*, 53.)
- 佐内信之 2000 インターネット立ちあい授業の試み。授業づくりネットワーク, 169, 9-14.
- 佐藤浩一・松島一利 2001 読み手を意識することが説明文の産出に及ぼす影響。日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 67.
- Scardamalia, M., Bereiter, C., & Steinbach, R. 1984 Teachability of reflective processes in written composition. *Cognitive Science*, 8, 173-190.
- 清水幾太郎 1953 私の文章作法 潮出版社
- 集英社 1996 imidas別冊付録 アジア & ワールド・データブック'96 集英社
- Shunk, D. H. 1981 Modeling and attributional effects on children's achievement: A self-efficacy analysis. *Journal of Educational Psychology*, 73, 93-105.
- Shunk, D. H. 1982 Effects of effort attributional feedback on children's perceived self-efficacy and achievement. *Journal of Educational Psychology*, 74, 548-556.
- Shunk, D. H. 1984 Sequential attributional feedback and children's achievement behaviors. *Journal of Educational Psychology*, 76, 1159-1169.
- 杉本明子 1991 意見文産出における内省を促す課題状況と説得スキーマ 教育心理学研究, 39, 153-162. (Sugimoto, A. 1991 Roles of task situation and a persuasion schema in reflection in writing opinion essays. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 39, 153-162.)
- 杉本卓 1989 文章を書く過程 『教科理解の認知心理学』(鈴木宏昭・鈴木高士・村山功・杉本卓編) 新曜社, Pp. 1-48.
- Teale, W. H & Sulzby, E. 1987 Literacy acquisition in early childhood: The roles of access and mediation in storybook reading. In Daniel, W. A (Ed). *The future of literacy in a changing world. Comparative and international education series, Vol. 1.* (pp. 111-130). Elmsford, NY, US: Pergamon Press, Inc.
- 筒井洋一・山岡萬謙 1999 研究交流部会討論報告 大学教育学会誌, 21 (2), 91-93. (Tutui, Y. & Yamaoka, K. 1999 Chairperson's notes. *Journal of the Liberal and General Education Society of Japan*, 21 (2), 91-93.)
- 梅田卓夫 2001 文章表現四〇〇字からのレッスン ちくま学芸文庫
- 吉倉紳一 1997 大学生に日本語を教える—必修「日



- 本語技法」新設の顛末 言語, 26 (3), 18-26.
- 吉倉紳一 1999 全学必修科目「日本語技法」の新設とそのマニュアル作成の経験 大学教育学会誌, 21(2), 82-86. (Yoshikura, S. 1999 An experience in introducing a new required subject- "technicalities of the Japanese Language" and preparation of its manual. *Journal of the Liberal and General Education Society of Japan*, 21(2), 82-86.)
- van der Hoeven 1999 Differences in writing performance: generating as indicator. In Torrance, M & Galbraith, D (Eds.), *Knowing what to write*. Amsterdam: Amsterdam University Press, Pp. 65-78.
- Voss, J. F., Vesondor, G. T., & Spilich, G. J. 1980 Text generation and recall by high high-knowledge individuals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, 651-667.
- Zimmerman, B J., & Bandura, A. 1994 Impact of self-regulatory influences on writing course attainment. *American Educational Research Journal*, 31(4), 845-862.
- Zimmerman, B. J., & Kitsantas, A. 1999 Acquiring writing revision skill: Shifting from process to outcome self-regulatory goals. *Journal of Educational Psychology*, 91, 241-250.
- Zimmerman, B. J., & Martinez-Pons, M. 1988 Construct validation of a strategy model of student self-regulated learning. *Journal of Educational Psychology*, 80, 284-290.
- Zimmerman & Martinez-Pons, M 1990 Student differences in self-regulated learning: relating grade, sex, and giftedness to self-efficacy and strategy use. *Journal of Educational Psychology*, 82, 51-59.

(2004年9月30日 受稿)

ABSTRACT

A Study of Writing Research

Hideyuki SAKIHAMA

This Study examined writing research in psychology and education, and have some perspectives on this research area. Studies on (1) writer's internal process (meta-cognition, self-regulation, self-efficacy), and (2) differences in writing process and text produced between expert and basic writers were reviewed. Throughout the review, it was indicated that the proportion of making use of internal process increased according to age. However, even adult writers have difficulty using internal process, so the importance of external intervention to writers were emphasized, especially, acquiring the skill of "idea selection" and "idea organization" ("content" aspect in writing activities). More and more researches are required about how to acquire skills on "content" aspect.

Key Words: writing research, writer's internal process, writing skill, idea selection, idea organization